「全線復旧」を追い風にして

再びつながった井川と川根。全線復旧という明るい話題は、奥大井の観光振興や両地域の交流促進への追い風となることが期待されます。
さらなる誘客や魅力発信に向けたさまざまな取り組みが、沿線各地で加速しています。

観光デジタルサイネージを千頭駅前広場に設置

町では、あぷとラインやSLの始発駅・終着駅である千頭駅前の広場に、観光デジタルサイネージ（電光掲示板）を設置しました。

この機器はタッチパネル式画面となっており、町内の宿泊施設や飲食店などの情報を自由に調べることができるほか、内蔵カメラで町内の観光スポットをフォトフレームに記念撮影をすることもできます。タイムリーな情報を提供することで、観光客の円滑な誘導と回遊性向上による地域経済の活性化が期待されます。

目的別・エリア別に観光情報が検索できます

ふるさと納税の返礼品に千頭駅～井川駅間の周遊券

応援したい自治体に個人が寄付する「ふるさと納税制度」。町でも、特産品をはじめとするお礼の品を用意していますが、このたびのあぷとライン全線復旧に伴い、新たに千頭駅～井川駅間の周遊券（フリーきっぷ）を返礼品の選択肢に加えました。

この周遊券で乗車すると、2日間にわたってあぷとライン沿線を自由に途中下車できます。また、寄附金額に応じて、大井川鐵道本線の周遊券（3日間）とのセットを選ぶこともできます。

周遊券は千頭駅でも購入することができます

井川と川根を結ぶ「いかわね新聞」次号に向けて編集作業中

「南アルプスユネスコエコパーク静岡地域連携協議会」では、井川地区と川根本町の魅力を一体的に伝える「いかわね新聞」を、年3回発行しています。

現在編集中で7月に発行予定の第6号では、3月に発行された第6号に引き続きあぷとラインに関する記事を掲載するほか、山開きを迎える南アルプスの見所についても紹介する予定です。

※協議会概要：両地域の官民団体で構成。南アルプス周辺地域の環境保全と文化継承、その地域資源の持続可能な利活用の推進が目的。

第6号は両地域の各世帯に配布したほか、公共施設や観光施設などにも配架中です。

サポーターズクラブが復旧を記念して桜を植栽

4月9日、大井川流域鉄道サポーターズクラブは、あぷとラインの全線開通を記念した「鉄道フォーラム」を長島ダムふれあい館にて開催しました。

フォーラムでは、会員が実施したあぷとラインへの体験乗車についての報告や、今後のサポート活動の取り組み内容に関する意見交換が行われました。

また、ふれあい館前の四季彩公園には、対岸を走るあぷとラインから見えるように、3本の桜が植樹されました。植えられたのは、寿命が比較的長いとされるエドヒガンザクラ。車窓から見える景色がいつまでも楽しいものであるように、という思いを込めて、会員がていねいに植えました。植栽作業中に対岸を列車が通過すると、会員は手を振って見送り、おもてなしの気持ちを新たにしました。

「ここに住む私たちこそ」

「たしかに、『エンジン』の役割が日常生活から離れていくことで、沿線住民の関心がだんだんと薄れていってしまう、という危機感はあります」。

サポーターズクラブの生田会長は、そう話します。

「エンジン」の走る風景

木材輸送から始まり、ダム建設の資材運搬用として、流域住民の足として、そして今、観光客をいざなう鉄道へと役割が変わりつつあるあぷとライン。

しかし生田会長は、この町に住む私たちがその存在を見つめ直す必要性を、問いかけます。

「あぷとラインは、大井川の恩恵を受けてきたこの地域の歩みを、私たちに教えてくれます。その意味では、むしろここに住む私たちが、あぷとラインの存在自体を地域のアイデンティティ（独自性）として捉え、目を向けていくべきなのではないでしょうか」。

湖上駅で挙式した石神さん夫妻は、あぷとラインが好きな理由を次のように話します。

「手を振り合うような身近な距離感だったり、沿線からにじみ出る『鉄道が愛されている』という空気感。私たちを含めた多くのファンは、そこに魅力を感じ、何度も足を運ぶのだと思います」。

土砂災害に屈することなく、再び千頭駅と井川駅を行き交い始めた「エンジン」。沿線の桜は散ってしまいましたが、これからの季節は、目にもまぶしい新緑が赤い車両を迎えます。